

---

# 魔王のスカートの中

雨宮雨彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王のスカートの中

### 【Nコード】

N2007G

### 【作者名】

雨宮雨彦

### 【あらすじ】

かくれんぼをしていてテフテフは、なんと魔王の長いスカートの中へと飛び込んでしまったのです。だけど彼は知りませんでした。魔王のスカートの中はただ暗がりになっているだけではなく、なんと別世界への通路でもあったのです。

テフテフというのは男の子の名前です。夏の間はひどく暑いので、テフテフは屋根裏部屋で寝起きをすることにしていました。あの連中が彼を訪れるようになったのは、それが原因だったのかもしれませんが。最初に気がついたのは、ベッドの下から聞こえてくる話し声でした。大きなものではなく、こそこそとしたささやきあい過ぎなかつたけれど、こう聞こえました。

「本当にいい匂いだろう？」

「ああ、本当だな」

「なぜこんなにいい匂いがするんだろうな」

不思議に思っただけで身体を乗り出し、もちろんテフテフはベッドの下をのぞき込みました。するとやはりそこにいて、でも驚いたことに子ブタぐらいの大きさの小鬼が三匹、顔をくっつけ合っているのと同じくわすじやありませんか。いかにも密談中という雰囲気、連中もテフテフに気づき、じろりとにらみ返してきます。三匹とも身体が真っ黒で、おしりにはかわいらしいしっぽがあり、思わず引つ張ってみたいような気持ちになりますが、もし本当にそんなことをしたら、とがったツメのある指先でめちやくちやに引つかかれそうです。牛かヤギのように、二本に分かれたひづめがつま先にあるのも見えます。

小鬼たちは身をひるがえらせ、それ以上一言も口をきくことなく、さっと姿を消しました。本当に一瞬で見えなくなってしまうのです。ベッドをぬけ出し、テフテフは四つんばいになって調べてみま

したが、クギを一本打ち込んでそのあと引きぬいてきたらしい小さな穴を壁に一つ見つけることができただけでした。魔物たちというのは、こんなに小さな穴でも自由に通り抜けることができるようでした。

そうやって真夜中にテフテフを訪れたのは、この小鬼たちが最後ではありませんでした。これ以後毎晩のように、テフテフは誰かの訪問を受けるようになったのです。それこそありとあらゆる魔物たちで、この世にはこんなに多くの怪物が存在するのかと感心しないではいられませんでした。

連中は一人だったり、数人で連れ立っていたりはしましたが、テフテフの屋根裏部屋を訪れ、空気の匂いをかいでいったのです。一人の例外もなく深呼吸をして、にっこりと帰っていきました。何の匂いをかいでいるのかさっぱりわからなかったのですが、それが理解できたのは2週間ほどたったころでした。その日の訪問者は子猫で、といってもしっぽが二本あり、身体の大きさがって子牛ぐらいありました。子供らしい遠慮のなさでベッドに飛び乗り、テフテフの手に鼻を押し付けてきたのです。ひくひくさせてひとしきり匂いをかぎ、満足そうに顔を上げてテフテフを見ました。口を開け、5センチはありそうなキバを見せて、うれしそうにニヤアと笑います。

でもあんまり遠慮がなさすぎると思ったのか、すぐに母親猫が現れて、子猫の首筋をくわえてさっと身をひるがえらせ、壁のいつもの穴を通って、あっという間に姿を消してしまいました。そうやって魔物たちの間では、テフテフの匂いのことが評判になっていったのだと思います。そしてとうとう、とんでもないやつの耳にまで入ってしまったようでした。

「おい坊主」テフテフは真夜中にたたき起こされました。毛布をは

ぎ取られ、肩をつつかれたのです。目を開くと、最初の夜に見た小鬼たちがテフテフを取り囲んでいました。

「何の用さ？」テフテフがびっくりしなかったといえはウソになります。

両親がいる下の階に声が聞こえることも気にしない様子で、小鬼たちはげらげら笑い始めました。「あるお方が、おまえの匂いをかいでみたいとおっしゃってな。今からおまえを連れていくのだよ」

「どこへ？」

「そのお方のいるところへさ。そうれ」小鬼たちは声を合わせて、テフテフのベッドのシートをつかみました。あっと思ったときにはテフテフはその中に包まれ、何も見えなくなっていました。そのままくるくると巻かれ、小鬼たちの肩の上に乗せられたようでした。

「それ行くぞ」合図をして、小鬼たちは走り始めました。物音と話し声で目を覚まし、両親が階段を駆け上がったのがわかりましたが、どうしようもありませんでした。両親はドアをたたき、テフテフの名を呼んでいます。

アリのように小さくなつてクギの穴を通り抜けるという経験が、テフテフには強烈すぎたのかもしれませんが。気を失ってしまつたらしくてその後のことは何一つ覚えておらず、気がついたときにはすでに魔王の巣の中にいました。もちろん始めから、ここが魔王の巣だとわかっていたわけではありません。最初はただの古い建物の内部としか思えませんでした。おとぎ話に出てくるお城のように石できていて、見上げるとあっと驚くほど天井が高い。階段や廊下、橋やトンネルが入り組んで、内部はまるで迷路のようになっていま

す。

テフテフは目を覚まし、一人ぼっちでいることに気がついて、少し歩き回ってみることにしました。でもどこまで行っても、迷路のような通路や階段が続いているばかりです。人影はまったくなく、すぐに足も疲れてしまいました。テフテフは床に座り、自分でも気がつかないうちに横になり、再び眠ってしまったようでした。もう一度目を覚ましたときには、テフテフはさっきよりもさらに激しく驚かなくてはなりませんでした。魔王がそばにさがみ、テフテフの手を取って匂いをかいでいたのです。

彼女は非常に背が高く、濃いブルーの美しいドレスを身につけていました。顔は見えないけれど、テフテフの手を鼻に押し当て、いかにも幸福そうに目を閉じている様子です。髪は長くきちんと編まれ、彼女の頭のまわりをぐるりと王冠のように取り巻いています。「あっ」小さな声だったけれど、思わずテフテフの口から漏れてしまいました。魔王は気づき、テフテフの手をさっと放しました。それだけではなく、立ち上がってテフテフに背中を向けました。

「あんたはだれ？」テフテフが次の言葉を発することができたのは、一分以上たってからのことでした。

「魔王だ」魔王は答えます。

「魔王？」

「黙れ！」ちらりと振り返り、見られないように顔を隠しながら、魔王はテフテフをにらみつけました。背中を向けたまま歩み去り、どこかへ行ってしまいました。

彼女を追いかけていくことすら思いつくことができなくて、テフは床の上に座ったままでいました。でも突然何かの気配を感じて振り返ると、例の小鬼の一人が壁から姿をあらわすところでした。手品師が帽子の中から取り出すウサギのように、予告もなくヒュッと飛び出してきたのです。石でできた城なのだから、針の先ほどの隙間など何千とあるのでしょうか。「あれが魔王様さ」小鬼は口を開きました。

「魔王って?」

「魔王と言えば魔王だ。いささか不幸なお方ではあるがな」

「なぜ不幸なの?」

「そんなことより、おまえは腹が減ったろう? 部屋に食事を用意してやったぞ」

「部屋って?」

「ついてこい。案内してやる」長い廊下を通って、テフテフはある部屋へ連れていかれました。道順は複雑で、迷子になってしまうのではないかと不安になったけれど、そんなことはありませんでした。数日たつうちに、テフテフはすぐに覚えてしまいました。

自分の部屋にはじめて足を踏み入れたとき、テフテフは少し驚きました。宮殿のようといえば大げさだけれど、きれいに飾り付けられ、整えられた部屋だったのです。金持ちの家の子供部屋のようにいえばいいかもしれません。すみには本棚や戸棚があり、鮮やかな色の本やゲームの類が並べられています。一人で遊ぶことができる種類のゲームばかりだということにはすぐに気がつきましたが、「

ほら、おまえの食事はここに用意してあるぞ」と小鬼が話しかけてきたので、テフテフは振り返りました。

小鬼はテーブルを指さしていました。肉料理やパン、サラダといったものが乗せられ、温かい紅茶が湯気を立てています。デザートにフルーツまであることに気がついて、につこりしないではいられませんでした。「本当に食べていいの？」

「ああ」小鬼は笑い、テフテフのためにイスを引いてくれました。  
「オレの名はスケッチというんだ」

「変な名前」腰かけながらテフテフは言いました。

「早く食べないと冷めてしまうぞ。食器はあとで取りにこさせよう」満足そうにテフテフを見やり、スケッチは部屋を出ていこうとしました。なんだか少し気になる表情のような気がしなくてもありませんでした。目の前の食べ物があまりにもおいしそうなので、今は考えないことにしました。不思議なことに、食べ終わるとテフテフはすぐに眠気を感じ始めました。せめて誰かが食器を取りにくるまではと思っていたのですが、とうとう我慢できずにベッドに入ってしまった。寝室は隣の部屋にあり、やわらかで大きなベッドがテフテフを待っていました。

翌朝目が覚めても、テフテフはやはり魔王の巣の中にいました。あれは夢だったのだろうかと思いつきながら目を覚めたのですが、自分がいるのは愛想のない屋根裏部屋などではなく、飾り付けられた広い部屋のベッドの上だとすぐに気がついたのです。何だかくすぐったいような幸せな気分、毛布にくるまったまましばらく部屋の中を見回していたのですが、ノックの音が聞こえドアが開いたので、テフテフはそちらに顔を向けました。



女の小鬼がテフテフのために朝食を運んできたところでした。長いスカートで足を隠してはいるけれど、顔つきや身体つきは男の小鬼たちと変わりません。「ほれ、朝ごはんだよ」と女は言い、ベッドの上に乗せてくれました。

「うん」テフテフはゆっくりと身体を起こしました。

この日は一日中、魔王の巣の中でテフテフは楽しく過ごすことができました。退屈することはなく、あちこちの壁の隙間から魔物がいくつも現れては、遊び相手をしてくれたのです。中でも一番気に入ったのは若いメスのユニコーンで、テフテフを背中に乗せて運び、巣の中を連れ歩いてくれました。

驚いたのは、ここには窓が一つもないことでした。廊下も部屋もあるのは壁ばかりで、外の景色を見ることがまったくできないのです。明かりは、ところどころの壁で燃えているロウソクから得ていました。でもそれ以上に不思議だったのは、この迷路のような廊下や階段がどこまで行っても終わりにならず、角を一つ曲がると必ず次の角が、階段を一つ登るとまた必ず次の階段が顔を出すことでした。「この巣は、一体どのくらいの大きさがあるの？」背中の上で運ばれながら、テフテフはユニコーンに質問してみました。

につこりして、ユニコーンは答えてくれました。「決まった大きさというものはありません。右へも左へも上へも下へも、魔王の巣は無限に広がっているのです」

「どうして？ そんなに巨大なものが地球上のどこに建設できたの？もしかして、この城は地底にあるの？」

「いいえ」ユニコーンは首を横に振りました。「この巢は地球にあるわけではありません。『昨日』と『今日』の隙間に、まるで糸でつるされた振り子のようにぶら下がっているのです。真夜中の12時になると、昨日から今日へはあつという間、一瞬のうちに切り替わってしまふでしょう？ 日付と日付の境目は一瞬、ほんの一秒間もない。だから針の先のように細い穴を通り抜ける力のある者でないと、この巢へはやってくることができないのです」

「へえ」

夕方になって、テフテフは自分の部屋へ戻ってきました。昨日と同じような夕食が用意してあり、食べ終わるとまたすぐに眠くなり、ベッドにもぐりこんでしまいました。

そうやって数日があつという間にすぎてしまったのですが、さすがにテフテフも奇妙に思い始めました。魔王はあれ以来一度も姿を見せていませんでした。それはかまわないのだけど、なぜ自分がいつも夕食を食べ終わるととたんに眠り込んでしまうのか、不思議で仕方がなくなってしまったのです。だからテフテフは、ちよつとした実験をやってみることにしました。その日の夕食を目の前にしてテフテフは考えました。肉料理や野菜、パンやデザートが並んでいます。この中に睡眠薬を混ぜるのなら、僕だったらどれを選ぶだろう。

たぶんデザートだろうという気がしました。これまでの経験からいって、かなり強力な薬のようでした。もしデザート以外のものに入れたのなら、テフテフは食事の途中で眠り込んでしまったことでしょう。だからテフテフはこの日、デザートだけは食べないでおくことにしました。食器を取りにきた者にはれないように、テーブルの下の見えない場所に隠しておきました。そうやっておいて寝室へ

戻り、ベッドに入って待ったのです。

ずっと起きているつもりで目を開いていたのですが、やはりいつの間にか眠ってしまったようでした。何かの気配で目を覚ましたのだけど、衣ずれか息づかいが、ベッドが立てるかすかなきしみのせいだっただのかもしれない。そっと開いたテフテフの目に、その姿が入ったのです。魔王でした。背中を見せてベッドに腰かけ、テフテフの手を取って鼻に押し当て、匂いをかいでいます。後ろから眺めていても、さも心地よさそうな様子です。

そんなによい匂いがするのだろうかと自分でも不思議な気持ちになりましたが、何も言わず、しばらくの間テフテフは見つめていました。すると突然、こちらを向いたわけでもないのに、テフテフが目を開いていることに魔王は気がついたのです。前るときと同じようにテフテフの手を捨て、彼女はさっと立ち上がって背中を向けました。足音を響かせ、部屋を出ていってしまいました。ドアがバタンと大きな音を立てて閉まりました。朝になって、テフテフはスケッチに質問してみました。「魔王は、自分の顔を見られることをどうしてあんなに嫌うの?」

ポケットから取り出したリングをテフテフに向かって差し出したところでしたが、スケッチはすぐに答えてくれました。「魔王様は、自分がとても醜い顔をしていると思っておられるからだよ。だから常にお顔を隠しておられる」

「どうして?」

「どうもこうも、そういうことなのだよ」

「本当にそんな顔をしているの?」

スケッチは首を横に振りました。「それが魔王様ご自身はもちろん、わたしの誰一人として見たことがある者はいないのだよ。魔王様も、お部屋に鏡すら置かれないほどだ」

この日の夕食にもデザートはもちろんついていましたが、二つに折られた白い紙がそえられていました。広げてみると誰かの手書きの文字で、「今日のデザートには何も入ってはおらぬ。安心して食せ」と書かれていました。

料理を運んできたのは、なんとなく心配そうな表情をしたスケッチだったので、テフテフはその紙を見せました。「魔王様の文字だ」スケッチは小さくうめきました。「何を考えておいでなのか」

「あんたにもわからないの？」

「見当もつかん」

スケッチは部屋を出ていき、テフテフは一人になって食べ始めました。もちろんデザートにも手をつけました。ちよつとときどきしながら待っていたのですが、食べ終わっても眠くなる気配はありませんでした。といつても、まったく疲れていなかったわけではありません。昼間はさんざん魔物たちと遊んでいたのだから。今日は魔物の子供らを広い部屋に集めて、運動会のようなことをやりました。巢の中いっぱいに足音や歓声が響き渡っていたに違いありません。

夕食を終えて一時間以上すぎて、まぶたが自然に重くなってから、テフテフは寝室へ向かい、着替えてベッドにもぐりこみました。そうやってぐっすり眠っていたのですが、真夜中にかすかな足音で目を覚ましました。誰かが廊下を歩いている様子です。足音はゆっく

りと近づき、この部屋の前で止まりました。ドアが開く音が聞こえ、テフテフは目を開き、身体を起こして待っていました。入ってきたのはもちろん魔王でした。

でも魔王は、黒い布袋をすっぽりとかぶって顔を隠していました。まるでゴミ袋が突っ立っているような眺めだとテフテフは思ったのですが、笑わないことにしました。目のところには小さなのぞき穴が開けてあるので、淡い色の瞳だけが姿を見せています。瞳はあんなにきれいな色をしているのに、という気がしました。

「私としたことが、昨夜はまんまとしてやられた」魔王は口を開き、ベッドのすみに腰かけました。「少し邪魔をしても怒らぬであろう？」

「うん」

「おまえにちょっとした贈り物を持ってきたのだよ」手のひらを広げ、魔王はテフテフの前に差し出しました。

「なんなの？」テフテフが首を伸ばすと、魔王は手の上に乗せてくれました。長さ2センチほどのかわいらしい昆虫の彫刻でした。金属で作られ、コガネムシの姿をしています。羽根の模様や針金のように細いヒゲ、6本ある足の形まで細かく作られています。金属の色をしていなければ、今にも動き出しそうです。

「これは何なの？」テフテフは魔王を見上げました。

「ピラミッドがまだ盛んに作られていた時代に、エジプトの王が私にささげたものだ。本物の黄金でできているのだよ。おまえにやろう」

「どうして？」

魔王は少し口ごもりました。「見返りを期待していないわけではない。条件があるのだ。これからは毎晩、真夜中に私はこの部屋を訪れる。おまえが眠っているこの部屋だ。そのときおまえは文句を言わず、おとなしく私に匂いをかがせるのだ」

「僕の匂い？」

「もちろん」魔王はうなずきます。

「それくらいならいいけど…」

「では決まりだ」突然抱き上げられたので、テフテフは少し驚きました。魔王はテフテフをひざの上に座らせたのです。そのままテフテフの頭を自分の肩にもたせかけました。髪に鼻をうずめ、匂いをかいでいるようです。もらったばかりの黄金のコガネムシを眺めながら、テフテフはされるままになっていました。

言葉どおり、魔王は毎晩テフテフを訪れるようになりました。ひざに乗せて匂いをかぎながら、ベッドに腰かけて1時間ほど過ごすようになったのです。気がすむとテフテフをベッドに戻し、そっと部屋を出ていきます。

夕食はいつも同じように自分の部屋で取りましたが、ときどき手紙が添えられていることがありました。いつも魔王の手書きの文字で、「今日はこんな珍しいものが手に入った」というような内容でした。だからテフテフは、誰も見たことも聞いたこともない食べ物をつくも味わったことがあるのです。

テフテフの部屋を訪れるとき、魔王はときどき贈り物をたずさえていました。部屋の戸棚の中は、そうやってもらったもののコレクションが少しずつ増えていきました。宝石やアクセサリーのようなものが多かったけれど、生きているサメの子供が一匹、金魚バチの中に入れてあるし、化石化していない、つまり生身の骨のままのテイラノザウルスのキバも一本あって、まだ子供の恐竜だったのか、大きさはテフテフの親指と同じぐらいしかありません。

ときどきは、魔王が数晩にわたって姿を見せないこともありました。スケッチたちも何も教えてくれないので少し心配したのだけど、しばらくするとまた姿を見せるようになりました。

魔王がテフテフの部屋にいる時間は次第に長くなっていき、今ではもう二時間ばかりすごすのが当たり前になっていました。テフテフをひざに乗せ、いろいろな話を聞かせてくれました。中でもおもしろかったのはある愚か者の話で、月夜の塀にうつった自分の影を怪物と勘違いして剣で切りかかり、川の中に落としてしまった金貨を拾い上げるためにダムを作り、水をせき止めたのはいいのですが、そのせいで町中が水びたしになってしまいました。

「ねえ」ある夜、テフテフは魔王に話しかけました。「あんたは本当に自分の顔を見たことがないの？」

黒い袋の下で、彼女はかすかに微笑んだようでした。「本当にないのだよ」

「なぜ？」

「私の顔は、おまえはもちろん、私自身ですら直視できぬほど醜い

ものだからだ。誰一人見た者はいない」

「ふうん」誰も見たことがないのなら、どうして醜いとわかるのだろうという気がしたのだけど、口には出さないでおくことにしました。テフテフと魔王は、そうやって親しくなっていきました。昼間、城の廊下で偶然出会うこともありました。何かの用事で通りかかったのだろうけど、彼女が姿を見せると魔物たちは騒ぐのをやめ、みなさつと壁の中へ消えてしまいます。そうやって静かになった廊下に足音が響き、魔王がやってくるのです。

一度テフテフはユニコーンの背中の上にいたことがあるのだけど、突然前足で立ち上がってテフテフを振り落とし、ユニコーンも壁の中に飛び込んでしまいました。後には、しりもちをついてきょとんとしているテフテフ一人が残されました。その様子を見て、魔王はおかしそうに笑ったものでした。彼女の笑い声を聞くと、釣られてテフテフまでニコニコしてしまいました。

「さあ、おいで」手を引いて立ち上がらせ、魔王はテフテフを部屋へ連れかえってくれました。

あのとかなぜあんなことをしたのか、テフテフは自分でもよくわかりませんでした。魔物の子供らと一緒に、テフテフはかくれんぼをしていました。魔王の巢の内部はごたごたと入り組んでいて、こういう遊びをするには本当に都合でした。オニが決められ、他の全員はいつせいに隠れ始めます。テフテフも隠れなくてはならなかったのだけど、いい場所はなかなか見つからなくて、たまたま目についたあそこに何も考えずに飛び込んだというわけでした。



廊下を走り、テフテフは角を一つ曲がったところでした。そこに魔王が立っているのが見えました。いつものように長いドレスを身につけた背の高い姿です。テフテフは彼女のスカートのすそを持ち上げ、その中に飛び込んだのです。そんなことをしても彼女は怒ったりしないということはわかっていました。テフテフと魔王はそれほど親しくなっていたのです。

魔王は本当に怒りませんでした。自分をスカートの中に入れ、そのまま立っているののでテフテフは身体を丸め、四つんばいになってじっとしていました。スカートの中は真っ暗です。やがて誰かの足音が近づいてきました。オニになっている魔物の子でしょう。角を曲がって立ち止まり、こちらを見ている様子です。「どうした？」魔王が話しかけました。

「テフテフを見かけませんでしたか？」魔物の子は言いました。「かくれんぼをしてるんです。こっちへきたと思ったのに」

「それは知らないな」魔王は平気な声で答えました。でもテフテフが彼らの会話を聞いていることができたのは、ここまででした。スカートの中は真っ暗なので、目を開けていても仕方がないほどです。目の前にあるはずの床だっただけで、見ることができず、本当にそこにあるのだろうか、思わず手を伸ばして確かめてみないではいられませんでした。

テフテフが期待していたのは、もちろん乾いた石の表面がそこにあることでした。石畳になった床です。だけどテフテフは、思わずあつと声を上げてしまいました。手を伸ばしても、そこには何もなかったからです。まるで穴でも開いているかのようで、幽霊に向かってグイと手を突き出して、そこに何もないとわかってぞっとするときのような感じです。ひざに当たっていた床の感触も同時に消滅

して、気がついたときにはテフテフの身体は落下を始めていました。

魔王のスカートの中は、ただ光が当たらなくて暗いだけではなく、井戸の穴のように何もない場所だなどとはテフテフはまったく知らなかったのです。悲鳴を上げながら、テフテフは落ちていきました。そうやって、どこまで落ちていったと思います？

テフテフが生まれて育ったのは、ある小さな王国の首都でした。寝起きしていた屋根裏部屋の窓からだって、王宮の姿を見ることができました。石できていて、屋根のところが古くさい建物ですが、あそこには女王がいて、この国全体を支配していました。

女王の名はジュディといいました。まだ若いけれど結婚はしておらず、きれいな銀色の髪はきつくカールしながら頭のまわりをおおっています。テフテフは噂でしか知らなかったけれど、あまり親切な人ではないそうでした。王宮の中にと、ときどきこの女王の怒鳴り声や金切り声が聞こえてくるそうでした。時計や宝石を作る産業が盛んで、技術も高いので、小さいけれどこの国はとても豊かです。暮らしやすくもあるのだけど、女王ジュディはこの国が持つ唯一の欠点だといわれている人でした。

魔王のスカートの中を落ちてゆき、テフテフが行きついたのがこのジュディの王宮だったのです。しかも落ちていった場所が女王の住まいの内部で、四角い壁で囲まれたあのプライベートな部屋だったのです。さらにまずかったのは、下着を下ろして、女王がおしりをむき出しにしている瞬間だったことでした。女王は「ギャッ」と悲鳴を上げましたが、テフテフが突然頭の上に落ちてきたのだから無理ありません。ルビーの髪飾りが外れてポチャンと水の中に落ちてしまったけれど、あとで誰が拾い上げたのかは知りません。

「おまえは誰じゃ？」床の上に転がっているテフテフを、女王はにらみつけました。「顔を見せい」

テフテフは顔など隠してはいなかったのですが、見えないのは眼鏡がないせいだと気がついて、あわてて床から拾い上げて、テフテフは手渡ししました。女王は引ったくり、自分の顔にかけました。それまでには何とか、テフテフは身体を起こすことができました。だけど五分後には、がっしりした身体つきの衛兵たちに両手をつかまれ、テフテフは廊下をむりやり引っ張っていかれるところでした。背後からはまだ女王のわめき声が聞こえています。女王はかんかんで金切り声を上げて兵を呼び、テフテフを引き渡したのです。言い分なんか聞いてもくれませんでした。テフテフが向かう先が地下の牢屋だったことは言うまでもありません。

王宮の地下は魔王の巢と同じように階段が多く、入り組んでいたけれど、もっと薄暗く空気も湿っていました。テフテフは牢屋の一つに入れられ、ドアが閉められました。鍵がかけられる音がガチャガチャと聞こえてきます。衛兵たちの足音は、すぐに遠く聞こえなくなってしまうました。声を上げて泣きたくなったけれど、誰にも聞こえないだろうからやめておきました。小さな口ウソクが一本灯っていて、テフテフは牢屋の中を見回すことができました。

さっきの衛兵たちが、女王の言うことが信じられないという顔つきでいたことを思い出しました。それも無理はないと思います。厳重に警備されている王宮の奥深く、トイレの天井から子供が落ちてきただなんて、誰だって信じないでしょう。でも家来たちは女王をひどく恐れていて、口ごたえどころか、質問する勇氣すらないようでした。だから家来たちはテフテフのことを、わけのわからない容疑を女王からかけられてしまった気の毒な子供だと思ってくれたようでした。

五分もたたないうちに再び牢屋のドアが開き、若い女官が現れました。兵の誰かからテフテフのことを聞かされ、おなかをすかせているのではないかと心配してくれたのかもしれませんが。盆に載せて食べ物を選んでくれたのでした。女官は気の毒そうな目でテフテフを見ていましたが、会話することは禁止されていたのかもしれませんが。食べ物を置いて、そのまま出ていってしまいました。

盆ごと置かれた食べ物を見た瞬間、テフテフは飛び上がるほどうれしくなりました。でもおなかが減っていたからでも、とてもおいしそうだったからでもありません。パンと茶とシチューというメニューだったのですが、スプーンと一緒に小さなフォークがそえられていることに気がついたからです。テフテフはフォークを手にし、しっかりと握りなおし、とがった先端を部屋の壁に突き立てたのです。牢屋の壁はしっかりとした木材で作られていました。高級なものではないけれど、目のつまった頑丈なものです。節穴など一つもありませんでした。

テフテフはそこへフォークを突き立てたのです。手がすべって1、2回失敗したけれど、とうとう穴を開けることができました。もちろん深さ2ミリもないようなものです。直径も針の先ほどです。うまくいったのにんまりと笑い、次にテフテフは口ウソクを手にし、部屋のすみへと移動させました。口ウソクの黄色い光がその穴をできるだけ斜めに照らすようにしたのです。するとどうでしょう。光の加減で穴はもっと黒くはつきりとし、クギか何かを強く突き刺し、そのあと引き抜いて作った深い穴のように見え始めたではありませんか。その穴からユニコーンが飛び出してくるのには5秒もかかりませんでした。

「こんなところにいたのですか。ずっと探していたのですよ」ユニ

コーンは言いました。

「ねえ、お願いだから僕を助けてよ」

ユニコーンはテフテフを見つめました。テフテフがなぜこんな場所にいるのか、事情は察している様子です。振り返ってテフテフが作った穴を見、口を開きました。「もちろんお助けしたいのですが、この穴では浅すぎて、あなたを乗せて通り抜けるのは不可能でしょう」

「じゃあ、どうするの？」

「魔王様をお呼びするしかないでしょう。魔王様なら何とかできるでしょう」

「すぐに呼んできてよ」

ユニコーンは身構え、再び穴の中へ飛び込む用意をしました。「でもどこにいらっしゃるか、探すのに手間取るかもしれません」

「お願いだから早くしてよ」とテフテフは言いましたが、そのときにはもうユニコーンの姿は穴の中に消えていました。牢屋の中に一人で取り残されてしまい、テフテフは胸をどきどきさせながら待っていたのですが、魔王どころかユニコーンもなかなか戻ってはきませんでした。せまい中をイライラしながら歩き回っていたのですが、突然ガチャガチャという音がドアの外から聞こえてきたので、テフテフは思わず飛び上がりました。もちろんドアの鍵を開ける音です。ドアが開くと衛兵が二人立っていて、出てくるようにとテフテフに合図をしました。

数分後には、テフテフは女王の広間に引っ張り出されていました。この部屋のことは話には聞いていたけれど、実際に目にするのはテフテフも初めてでした。大きな教会の内部のように広く、石でできた壁には古代の英雄や伝説の登場人物たちの姿が彫りこまれています。玉座は部屋の中央にあり、巨人でも座ることができるほど大きく作られ、女王はその上にちょこんと腰かけています。おまけに常識はずれに高いステージがあり、玉座は長い階段でそれを登っていた先にあります。テフテフは口をぽかんとあけて見上げるようになりました。

「さておまえ」テフテフが目の前に引き出されると、女王は憎々しげに口を開きました。「何か言うことはないのか？ おまえは神聖な女王のトイレに侵入したのじゃぞ」

テフテフは事情を説明しようとしていました。自分の身体の匂いのこと。屋根裏部屋のこと。魔王の巢へ連れていかれたこと。魔王のスカートの中のこと。でももちろん、女王は信じてなんかくれませんでした。バカにした顔で言いました。「魔王だと？ 近ごろの子供は奇妙なことを思い込むものじゃな。私が子供だったころには、もっと現実的なことを考えておったぞ」

「子供だったころにも、あんたは今と同じような嫌われ者だったのかね？」と突然誰かが言いました。かなり失礼な発言だったけれど、問題なのは発言内容ではなく、それがどう聞いてもテフテフの声だったことです。でも断じてテフテフが言ったものではありません。命がおしければそんなことを言うはずがないし、テフテフは口を動かしてすらいなかったのです。だけど女王を含め、広間にいた人々はみなテフテフが言ったのだと思ったようでした。人々はざわめき始め、女王は顔色を変えていました。

「子供、言葉に気をつけたほうがよいぞ。女王の前であるぞ」

「違うよ」テフテフは言いました。「今は僕が言ったんじゃありません。誰かが僕の声音を使っただんです」

女王は広間の中をキョロキョロと見回しました。目を合わせたくなくて、家来たちは下を向きます。「そんな者はどこにもおらんぞ」女王はテフテフをにらみつけました。

「でも本当なんです。僕は魔王の巢へ連れていかれて、そこで魔王と一緒に……」

「まだ言つか。魔王などこの世にいるものか。いるならここへ呼んでこい。もし本当にいるのなら、この国の半分をくれてやるぞ」

「それはよいことを聞いた」突然また声が聞こえました。でも今度はテフテフの声音ではありません。肩にそつと手が置かれるのをテフテフは感じ、顔を上げると魔王がそこにいました。黒いゴミ袋をかぶったようなあの姿です。

「おまえは誰じゃ？ いつの間にここへ来た？」女王は大きな声を出しました。

布袋の下で、魔王は軽く笑ったようでした。「おまえが会いたがっていた者だよ。この国の半分をもらいにきてやったのだ」

「なんだと？」

「おまえはたった今そう言ったではないか。もし魔王が本当にいるのなら、この国の半分をやると」

「はかったな」憎々しげに女王は顔をゆがめました。

「それはどうかな？　しかし女王たるもの、一度口にした言葉を軽々しく取り消すことはできまい？」

「ふん」女王は鼻で笑いしました。「汚らしい悪魔相手に約束など守れるか」

「ほう」魔王は腹を立てた様子ではありませんでした。テフテフの肩から手を離し、一歩前に出ました。魔王は玉座に向かって歩き始めたのですが、誰も止めようとはしませんでした。止めようと思っても、できなかったのでしょう。女王は玉座の上に張り付けられたかのように身動きもできず、家来たちもまるで森の木々のようにその場に立ちつくしているだけです。みんな青い顔をして、魔王が足を動かすのを見つめているばかりでした。

玉座へ続く階段を魔王はゆっくりと登ってゆきます。すぐに女王と同じ高さになりました。そのまま玉座に近寄りますが、逃げ出すどころか、女王はやはり立ち上がることにすらできません。頭にかぶっている袋に魔王が手を伸ばしたことにテフテフは気がつきました。それを持ち上げるつもりなのかもしれません。女王の目の前に立ち、魔王は身体をのしかからせるようにしているので、そうなれば女王はその顔をまともに見ることになるでしょう。だけど背中を向けているので、テフテフや広間にいる人々からは死角になります。

「もう一度たずねる」魔王が言いました。「こうやって来てやったのだ。約束通りこの国の半分を私によこすか？」

「そんなことはできぬ」女王は目をむきました。でも魔王の身体を



押しのける勇気まではないようです。

「そうか」魔王は落ち着いた声で続けます。袋のはしをそつと持ち上げ、ほんのわずかチラリとだったようですが、女王に顔を見せた様子です。背後から見ていても、魔王がにやりと笑っているらしいのが感じられます。

「ひいっ」悲鳴を上げかけましたが、口の中に手を突っ込み、女王は何とか押し殺しました。女王の目玉は大きく飛び出し、血走り始めています。ゆっくりと手を動かし、魔王は袋を降ろして再び顔を隠しました。

「約束を守る気になったか？」魔王の声が広間に響きます。

公園にあるシーソーのように女王が激しくうなずくのが見えしました。満足そうに首を振り、魔王がステージの上から降りてきました。階段を歩きながら、再び口を開きます。「では私は、この国の半分をありがたくちょうだいすることにする。だが国の西半分や東半分かをもらうというのではない。北半分や南半分でもない。私はこの国の過去をもらい受けよう」

「過去だと？」ひじかけを強く握りしめ、女王は相手をにらみつけました。

「そうとも。過去と未来にむかって、時間は等しく同じ長さだけ伸びている。その後ろ半分、過去を私はもらうのだ。よいな？ 今この瞬間から、この国の過去はすべて私のものだぞ」

「ふん」女王は鼻を鳴らしました。「過去など不必要なものだ。過ぎ去ったただのゴミためにすぎぬ。人間には未来と現在だけあれば

よいわ」

女王を振り返り、魔王は眉を上げたようでした。「では決まりだ。この国の過去はすべて私のものとなった」隣に並ばれ、肩にそつと触れられ、テフテフは10秒後には魔王の巢へ連れ戻されていた。

魔王の巢の中で、それまでと同じ穏やかな生活が再び始まりました。テフテフは何も不満に思うことはなかったのですが、一つだけ気になっていることがありました。人間の世界のことです。女王ジュディはなんとも思っていないようだったけれど、過去を魔王に譲り渡すというのはどういうことなのだろう。テフテフは不安と興味を感じないではいられませんでした。でも魔王に質問してみる勇氣はありませんでした。魔王は相変わらず親切で、毎晩部屋へやってきたけれど、テフテフは口を閉じていました。

ユニコーンは、テフテフの言うことなら何でもきいてくれました。だからときどき背中に乗って、人間の世界へ連れ出してもらっていたのです。折りたたみ式の釣りざおのように額の角を引っ込めて、ユニコーンは普通の馬とそっくりな姿に化けることができました。その姿でなら、町の中を歩いても誰にも怪しまれることはありませんでした。だからこのあと人間の世界で起こった様々な出来事を、テフテフは自分の目で見ることになりました。

最初に目にしたのは、写真屋の前に人々が作っている長い行列でした。写真の入った額やアルバムを手に持ち、みんなかなり興奮した様子です。顔を赤くしている人もいます。意味がわからなくて、テフテフとユニコーンは顔を見合わせました。ユニコーンの背中から降り、身体が小さいことを利用して、テフテフは店の中にさっと入り込むことができました。受付のカウンターがあり、店の主人や

助手が困った表情で客たちの対応をしています。部屋の奥には照明装置やカメラが見えるので、みんなこの店で写真を撮った客たちなのでしょう。怒った客の怒鳴り声が耳に入りました。「これはただ一枚残った母の写真だったんだ。どうしてくれるんだ？」

その人が振り回しているアルバムに張ってある写真をテフテフはのぞき見ることができました。ドレスを着た上品な夫人がイスに座っているポートレートです。光がきちんと当たり、ピントもはつきりしたよい写真なのですが、一つだけおかしいことに気がつきました。婦人の顔がないのです。顔が本来あるべき場所は真っ黒に抜け落ち、まるで誰かがいたずらをして、写真の上に濃い黒インクでも塗りつけたかのように、顔つきも何もまったくわからなくなっています。

でも写真を眺めていて、テフテフは気がつきました。これはインクでもなんでもありません。写真の上に後から何かを塗りつけたのではなく、その部分にははじめから何も写っていなかったに違いありません。そつと手を伸ばして写真の表面に触れ、それを確かめることができました。表面はつるつるして、何かを張ったり塗りつけたりした様子はありません。見回すと、他の人々が手にしているアルバムや額の写真もすべて同じ状態であることがわかりました。きつと何百枚という数でしょうが、どの写真も人々の顔が黒くすっぱりと抜け落ちてしまっているのです。その部分はあまりにも黒々としているので、まるで真っ暗な井戸の底をのぞき込んでいるときのような気がしてくるほどです。

何だか背筋がぞつとするような感じがして、テフテフは写真屋を抜け出しました。魔王がやったことはもう明らかでした。町の通りを行くと、もつとたくさんの人々が騒いでいるのと出くわすことになりました。人々が口々に叫んでいる内容はにわかには信じられな

いようなものでしたが、確かめてみないではいられませんでした。

テフテフは魔王からこづかいももらっていました。ポケットからサイフを引っ張り出し、テフテフはお金を取り出してみたのです。するとやはりそうでした。この国の紙幣には先代の女王（女王ジユデイの母親にあたります）の肖像が印刷されているのですが、その顔もさっきの写真と同じように真っ黒にぬけ落ちていっているのです。このことを知って女王ジユデイが上げるであろう怒鳴り声が、テフテフは耳に聞こえるような気がしました。

このあと起こったことは、もう話すのも恐ろしいほどです。人間の世界は日に日に荒廃してゆきました。始めはほんのささいで、よく注意しないと気がつかないほどのものでした。美しかった公園や町の通りに少しずつホコリが積もり、ゴミが散らばっているのが目立つようになってゆきました。個人の家の庭も同じようで、花壇の手入れをする人はいなくなり、魚のいる池には落ち葉が浮き、十分な世話をしてもらえなくなった犬や猫たちも元気をなくしてゆきました。

そんな町の中を歩きながら、テフテフは一人の人に話しかけてみました。白髪のおじいさんで、庭の花壇のへりに力なく腰かけていたのです。少し離れた場所で待つてくれるようにユニコーンには言つて、テフテフは近寄りました。「こんにちは。なぜ花壇の世話をしないの？」

「なぜってあんた」おじいさんは顔を上げかけましたが、テフテフの顔にちらりと目を落としただけで気力がつきたのか、すぐにまた下を向いてしまいました。

「ねえ、どうしたの？」

「花や植木の世話をして、今日いかに美しく咲かせたところで、それもみな明日には魔王のものになってしまふのだ。そのために苦勞して、何の意味がある？」

「でも今日きれいな花を目にすることができたら、楽しくはない？」

「何を言っているのかね？　どんなに美しいものを見ても、明日になればそれがどれほど美しかったのか思い出すことすらできないのだよ。美しくも醜くも、過去のはすべて魔王の所有物となってしまう。わたしたちにはもうかすかにしか思い出すことのできないかなたへ行ってしまうのだ」

突然テフテフは、あることを思いつきました。「じゃあ悲しみはどうなの？　きれいなものや素敵なものがみな魔王の所有物になってしまうといっても、嫌なものや悲しいものも同じように魔王のところへ行ってしまうのなら、おあいこになるんじゃない？」

おじいさんは、ゆっくりと首を横に振りしました。「たとえ悲しみであっても、他人に奪われてしまうよりは自分の内に持つておきたいものだよ。あんたのような子供にはわからんことだろうが、自分のものであれば、心の傷でさえ愛しく感じられるものだよ」

「ふうん」

このとき突然、背後から甲高い声が聞こえてきました。「おお、ここにいたか」

振り返るとスケッチでした。道路をおおつ石畳の隙間から現れて、テフテフに向かって歩いてくるところでした。おじいさんももちろ

んその姿に気がつきました。そしてテフテフが魔王の仲間だとわかったに違いありません。その目が一瞬ギラリと光りました。でもそれは本当に一瞬のことにすぎず、すぐにまた元のぼんやりした表情に戻ってしまいました。おじいさんがつぶやくのがテフテフの耳に入りました。「まあいいわい。たとえあの子供をぶん殴ってタンコブを作ってやったとしても、それも明日には魔王のものになってしまふのだ。何の意味もない」

立ち止まり、指で自分のひげの先に触れ、スケッチはテフテフとおじいさんを面白そうに眺めています。「何の用？」とテフテフはスケッチに言いました。

「魔王様がお呼びだ。何かおいしいものを手に入れたとかで、すぐに巢へ戻れとおおせだ。だから早く来い。ユニコーンはどこだ？」

もちろんテフテフは言われたとおりにしました。小さな子供に過ぎないテフテフに、それ以外の何ができるというのです？ 巢へ戻ると、魔王はいつものように親切に迎えてくれました。テーブルの上には珍しい果物が用意しており、皮をむいてきれいに切り分けられ、フォークと一緒にテフテフを待っていました。魔王のひざに座り、テフテフはそれを食べ始めました。でも魔王は、テフテフの様子がおかしいことにすでに気づいているようでした。「どうした？」テフテフの髪に鼻先をうずめながら、魔王がささやきました。

「なんでもない」

「ウソをつくな。私にウソは通じぬぞ」でも魔王の声は、怒っている様子ではありませんでした。「話せ」

だからテフテフは、人間の世界で見聞きしたことを話し始めまし

た。最初はほんの少し話すだけのつもりだったのに、話し出すと止まらなくなり、食べかけの果物のことも忘れて、気がついたときにはすべてを話してしまっていました。

「ふうむ」袋のせいで顔は見えないので、魔王の表情はわかりません。でもニンマリ笑っているらしいのは感じられ、テフテフは彼女のことがいっぺんで嫌いになりました。

「ねえ…」テフテフは口を開きかけます。

「それでおまえは、私にどうしろというのだね？」魔王の声は普段と同じで、怒りも憎しみも不信もそこにはまったく感じられませんでした。

「人間たちに過去を返してやってよ」

「ふん」魔王は楽しそうに笑いました。「なぜ私がそんなことをせねばならん？」

「だって…」

「人間たちの過去を私は正式に譲り受けたのだ。返してやる義理などないではないか」

「でも…」

「まあ聞け」やはり見ることはできないのですが、今度こそ魔王はあの袋の下でニヤニヤ笑ってるのに違いありませんでした。魔王はある計画を話してくれました。はじめはテフテフも不審そうな顔をして聞いていたのですが、のみ込めてくるにつれ興奮を感じないで

はいられませんでした。

魔王は人間たちに、過去を条件付きで返してやることにしたのです。その条件というのは、一応返してはやるが、それでも過去は魔王の管轄下にとどまるというものでした。管轄というのは魔王が所有し、ファイルにまとめて管理するということです。だから過去に関する何かを手に入れたければ、人間は魔王に税金を納めなくてはならなくなっただけでした。それどころか魔王が面白半分にテフテフを『過去管理局』の長官に任命してしまったので、話はさらにややこしくなりました。

毎朝テフテフはベッドから起き出して、過去管理局のオフィスへと出勤するようになりました。あなたが生きている『今』というこの瞬間も、一瞬後には過去となってしまうです。5秒たったら5秒前の過去、10秒たったら10秒前の過去です。人間たちのそういう過去に、テフテフはすべて税金をかけました。未来を見つめ、今だけを生きているタイプの人々からはテフテフはお金を取ることができません。そういう人は過去を振り返ったり、昔のことを思い出したりはしないものです。けどそんな人はほんの一握りで、無視してもいい数に過ぎません。過去管理局の出納部は、いつも大儲けができました。

ただテフテフも、5分前や10分前といった短い過去に対して税金をかけることはしませんでした。あまりにも数がありすぎて、事務手続きが多くなるからです。あなただって、友達とおしゃべりしながら3分前の会話を思い出すためにいちいち申込書に記入し、街中に何百カ所もあるとはいえ管理局の支所まで行き、お金を払って自分のファイルを閲覧してなどいられないでしょう？ そんなことをしている間に、自分が何のために管理局へ行くこうとしていたのかということだって忘れてしまうに違いありません。



だからテフテフは1年以内に限り、過去を使用したり思い出した  
りすることを自由にしたのです。これを『過去の時限つき自由化』  
といいます。魔王とも相談してこれを認めることにしたのです。  
この決定により過去管理局の事務処理量を大幅に減らすことに成功  
したので、かなりの行政改革といえました。

でももし1年以上前のことを思い出したいと思つたら、これはも  
う大変です。あなたは管理局へ出向き、テフテフのポケットへお金  
を入れなくてはなりません。

あるとき、かすかだけれど魔王のスカートの中から泣き声のようなものが聞こえてくることにテフテフは気がつきました。女の声で、誰かがしくしく泣いているようです。テフテフを足元で遊ばせながら、ついさっきまで魔王は何かの本を読んでいたのだけれど、今はうたたねをしています。その長いスカートの中から聞こえてくるのです。

好奇心に駆られ、テフテフは耳をすませました。小さい声だけれど、たしかに聞こえています。間違いありません。テフテフはスカートのすそをほんの少し持ち上げてみました。少し迷いはしたのだけれど、思い切ってその中に飛び込んでみたのです。目の前は真っ暗になり、以前と同じような落下があつて、テフテフは女王ジュデイのトイレにつくことができました。

トイレといっても広々としています。2回目だからもう慣れていて、部屋の中心ではなく、できるだけ邪魔ものがなさそうすみっこにテフテフはうまく着地することができました。ここで女王ジュデイのあだ名について話しておきましょう。彼女のあだ名はなんと『カMEMシ女王』というのです。カMEMシというのは、コガネムシを丸く小さくしたような虫で、指でつつくともものすごくくいオナラをします。おまけに害虫でもあり、畑の木や植物の葉を食べて大きな被害を出すことのある嫌われ者です。でも女王ジュデイはこのカMEMシが大好きで、ペットとして自分の部屋で飼っているそうでしたが、このときテフテフにはその理由がわかったわけでした。

「おいで」やさしく手を引いて、女王はテフテフをトイレから連れ出しました。廊下を歩き、自分の部屋へ連れていってくれました。

そしてペットのカメモシがいる虫かごを見せてくれたのです。カゴの内部にはやわらかい土を敷きつめ、食べられる草を植え、誰かの手作りだろうけどボール紙製の小さなお城が置いてあります。その城の中にカメモシが一匹ぽつんというのは、奇妙な眺めではありました。そしてこのカメモシが女王ジュデイのただ一人の弟その人であると聞かされたとき、「どうしてこのカメモシがあんたの弟なの？」とテフテフが口にしたのは当然だと思います。

「語れば長い話になる」女王は、テフテフをそばのイスに座らせました。自分もその隣に座ります。

「どんな話？」

女王は語り始め、少し長かったけれど、あまり面白い話ではありませんでした。彼女の弟は有名ないたずら小僧で、ある日王宮の庭のベンチで気持ちよく昼寝をしていた野良猫に水をぶっかけるといういたずらをしたのはいいのだけど、それが何と有名な魔法使いフンメルが変身した姿で、もちろんフンメルは腹を立て、罰として魔法をかけて、弟をカメモシの姿に変えてしまったということでした。フンメルの怒りはまだとけてはおらず、10年たった今でも弟はこの姿のままにいるということでした。

当然のむくいだという気がしなくなかったけれど、女王は本当に悲しんでいる様子なので口にはしないことにしました。その代わりテフテフはこう言いました。「何とかフンメルに謝って、許してもらうことはできないの？」

「できぬ」女王は首を横に振りました。「弟を許さぬままフンメルは去年死んでしまった。135歳だったが、バッタの天ぷらを食べ過ぎて、腹を壊したのが死因だった」

「バツタ？」

「うまいぞ。食べたことはないのか？」

「ううん。じゃあもうあんたの弟を元にもどす方法はないの？」

「一つだけある」女王の目がきらりと光ったような気がテフテフはしました。「確かにフンメルは強力な魔法使いであった。だがこの世には、どのように強力な魔法でも解くことができ、弟を元の姿に戻すことができる物が一つだけあるのだよ」

「何なの？」

「それがなんと、魔王の靴下留めなのだ」

「靴下留めって？」

「知らぬのか？」女王は不思議そうな顔をしました。「ずり落ちぬように、レディが絹の靴下を留めておくためものだ。ほれ見せてやるっ」

スカートをまくりあげ、女王は見せてくれました。太ももの付け根までむき出しになったので威厳あふれる姿とは言いがたかったけれど、弟を助けるために必死になっていて気がつかないようだったし、テフテフも指摘する気にはなりませんでした。「靴下留めって、ガーターのことなんだね」テフテフは言いました。

「下々ではそう呼ぶのか？ まあよい。とにかくこれのことじゃ」

「魔王の靴下留めには、本当にそんなにすごい力があるの？」

「あるとも」再び女王の目がきらりと光りました。

だからテフテフは、魔王の靴下留めを手に入れなくてはならなくなっただけでした。けどどうすればいいのか、見当もつきません。確かにテフテフは、魔王のスカートの中にはしょっちゅう出入りしていました。今日だって魔王の巢へは、彼女のスカートの中を通って帰っていくのです。でもそのことと、靴下留めを手に入れることとはぜんぜん違います。頭を悩ませながら、テフテフは帰路に着きました。

この夜も、魔王はいつものようにテフテフの部屋へやってきました。彼女の様子はいつもとまったく同じでしたが、テフテフは少しどきどきしていたに違いありません。テフテフをひざに乗せ、いつものように魔王はお話を始めました。適当に相づちを打っていたけれど、テフテフの耳には何一つ入ってはいませんでした。ただタイミングをはかっていたのです。

とうとうその瞬間が来たようでした。魔王が気を抜いた一瞬、テフテフはそのスカートの中に飛び込んだのです。いつものように闇闇の中へ足から飛び込んでいったのですが、今回は彼女の靴下留めを手を持っていることが違いました。どんな形だったかを思い描き、昼間のうちから繰り返し頭の中で練習していたのです。うまい具合に靴下留めはさっと外れてくれ、手の中に握ったままテフテフは落下に身をまかせることになりました。

トイレの中でもう待ち構えていて、女王はすぐにテフテフをカメラシのいる部屋へと連れていきました。部屋の中はひとけがなく、ひっそりしています。虫かごに近寄り、身動きもしないカメラシを

テフテフはさつそくのぞき込んだけれど、背後で女王がドアに鍵をかけたことに気がついて振り返りました。「どうして鍵なんかかけるの？」

「それよりも例の靴下留めは持ってきたのだな？」

「ここにあるよ」テフテフは指先にぶら下げて見せました。

「よし」女王はうれしそうに笑います。

「早く弟を元の姿に戻してやらないと」

「弟？ 何の話だ？」

「だってこのカメモシでしょ？ 悪い魔法使いの魔力にかかって…」

驚いたことに、女王は大きな声で笑い始めたではありませんか。

その声が部屋の中に響きます。「ああ、あの作り話のことか」

「作り話？」

「そうさ。それをお寄こし」強い力でつかまれ、テフテフはあっという間に靴下留めを取り上げられてしまいました。

「僕にウソをついてたの？」

「子供は黙つとれ」女王はテフテフを大きく突き飛ばしました。床に転び、背中を強く打って、テフテフはしばらく息もできませんでした。その間に女王はスカートをまくりあげ、靴下留めをさつと自分の足にはめてしまったのです。それだけではなく、大きく口を開

けて女王は笑い始めたではありませんか。

「ついに私は魔力を手に入れたぞ」

「魔力って？」床の上に転がったまま、テフテフは目を丸くしていました。

「このことさ」一歩近寄り、女王はテフテフを見下ろしました。思わず下がって逃げ出そうとしましたが、壁に邪魔をされて立ち上がることもできませんでした。

「何をするの？」

「おしゃべりなクソガキよ、口を閉じておまえは力キになれ」得意満面で人差し指を突き出し、女王はテフテフを指さしました。テフテフは怖くなりました。今にもその指先から魔力がわき出して、自分に飛びかかってきそうな気がします。そうになったら、彼はあつという間に力キの姿に変えられてしまうに違いありません。海水を満たした水槽の中に入れて女王のペットにされるか、悪くすればフライにされ、夕食に食べられてしまうかもしれません。

ぎゅっと目を閉じ、自分の手足が短くなってやがてなくなり、全体が固いカラに包まれてしまうのをテフテフは待っていました。でもおかしいのです。いくら待っても何も起こりません。テフテフは元のテフテフのままで、目を開いて、おそろおそろ見上げることになりました。意外そうな顔をしているのは女王も同じでした。どうなっているのだろうという表情で、自分の指先を眺めています。「どうなってるの？」とうとうテフテフは口を開きました。

「私にもわからぬ」機嫌の悪い声で女王は答えました。だけどその

とき、部屋の中に突然別の声が響いたのです。

「それは当たり前だ」

女王とテフテフが同時に振り向くと、部屋のすみに魔王が立っているのが目に入りました。いつものように黒い袋をかぶった姿ですが、あきれたような目でこちらを見ているような気がします。「何だと？」もちろん女王はにらみつけました。

「その子は小さすぎて」魔王はテフテフを指さしました。「まだ右と左の区別がきちんとついていないのだ。左の靴下留めでは何の意味もないではないか」

「おまえ」耳を強くつまみ、女王はテフテフをむりやり立ち上げらせました。「左ではなく右の靴下留めだと、あれほど何回も言っておいたではないか。食事のときにナイフを持つほうの手だ」

女王はすでに怒りで顔を真っ赤にしておりましたが、魔王の次の言葉に耳にして、もっと赤くなりました。「あまり責めるな。その子は左利きだ」

「なんと」

「つまりだな」魔王はうれしそうに笑いました。「その子が左利きだったおかげでおまえの陰謀は失敗に終わり、私は魔力を失わずにすんだというわけだ」

歯ざしりをしている女王をその場に残し、テフテフと魔王は五分後には魔王の巢へと帰り着いていました。怒られるのではないかとテフテフはときどきしていたのですが、魔王は機嫌を悪くした様子



さえありませんでした。自分の部屋へ招き、お茶をいれて飲ませてくれたほです。ただ靴下留めは女王の部屋に残してきてしまったので、魔王も別のものを探してきて太ももにつけなくてはなりません。これ以後、魔王が左右そろっていない靴下留めをいつも身につけているようになったのは、こういう事情があったからです。

こんなことがあっても、魔王はテフテフに腹を立てたり、しかりつけたりはしませんでした。たまさかやすくお人よしで、でも他人のことを思いやるその性格が魔王も気に入っていたのかもしれない。また以前と同じような暮らしが始まり、テフテフは楽しく過ごすようになりました。

あるとき魔王が思いがけないことを口にしたので、テフテフはひどく驚きました。なんと「人間たちに過去をすべて返してやれ」というのです。テフテフにはわけがわかりませんでした。

「どうして？」

「理由などどうでもよい。おまえはただ言われたとおりにおし」魔王の声は固く、これ以上いくら質問しても何も答えてくれないだろうということは、テフテフも感じることができました。だから口を閉じ、「うん」とうなずくほかありませんでした。

翌日、文字通りあつという間に過去管理局のオフィスはすべて閉鎖されてしまいました。国中に何千カ所もあったものが全部です。入口は閉じられ、鍵がかけられ、事務を取っていた魔物たちも全員が魔王の巢へと引き上げていきました。そばで眺めていたテフテフも感心するほど魔物たちの行動は統制が取れ、少しの遅れもミスも

なく撤退を完了することができました。人間の世界にも、これほどきちんとした組織は存在しないかもしれません。

過去を返してもらってその後人間たちがどうしたのか、もちろんテフテフは興味を感じていました。だからこっそり人間の世界へ行ってみることにしたのです。仲のいいユニコーンが、すぐに連れて行ってくれました。

人間の世界に着き、ユニコーンの背中から降りて、テフテフは目を丸くすることになりました。町中が人々でいっぱいだったからです。通りも路地も人であふれ、みな浮かれ騒ぎ、喜びを身体の内側におさめきれずにあたりを走り回り、手をつないで輪を作ってダンスをしている人たちまでいました。まるで年に一度のお祭りのような騒ぎだったのです。

驚いて、テフテフは思わずキョロキョロ見回してしまいました。人々は職業も服装もみなまちまちで、まさかと思って振り返ると王宮の門までが大きく開かれ、誰でも自由に出入りできる状態になっているではありませんか。門番はどこにいるのだろうと思ったたら、人々の間に混じって同じように浮かれ騒いでいる姿を見つけることができました。

テフテフは町の中を見て歩きましたが、どこでも同じようなお祭り騒ぎが進行中でした。国民が全員繰り出しているに違いないと思えるほど道は混雑し、店も開いています。がカフェなどはお金も取らず、道ゆく人々にただでコーヒーを勧めているありさまで。勧められた人も楽しそうに受け取り、カップを口にあてています。過去が戻ってきたことがそれほどうれしかったのでしょうか。今では国中が同じようなお祭り騒ぎをしているのに違いありませんでした。

「もうよいだろう？ 戻っておいで」不意に耳元で魔王の声が聞こえたので、テフテフは驚きました。キヨロキヨロしたのですが、もちろん姿は見えません。でも次の瞬間には誰かの手で背後からえりくびをつかまれ、足の裏が地面を離れたかと思うと、もう魔王の巢の中にいたのでした。まるで猫の子のようにスカートの中から引っぱりあげられ、テフテフは床の上に置かれました。

こうして過去管理局長官の任を解かれ、テフテフも魔王の巢の中で一日を過ごすようになりました。真夜中にテフテフの部屋へやってくるだけでなく、魔王は昼間にもテフテフを自分の居間へ呼ぶようになりました。どこかの王宮にでもありそうな部屋そのままというのではないけれど、それでもきちんと整えられた広い部屋です。窓が一つもないことは巢の中の他の部屋と同じですが、ここにはもちろん鏡など一つもありませんでした。きれいな模様の織り込まれた布で壁は飾られ、家具類も磨きたてられています。木目模様の見える家具ばかりが選ばれ、お茶を飲むときのスプーンまでが白い陶器製のものを使っているという徹底ぶりだったのです。

テフテフも魔王も本を読むことが好きだったので、やわらかいソファーに並んで腰かけ、思い思いの本に顔をうずめて長い時間をすごすこともありました。部屋の中はとても静かで、聞こえてくるのはときどきページをめくる音だけです。テフテフの前ではもちろん魔王はいつもあの黒い袋をかぶっているのですが、あるとき魔王が本をパタンと閉じ、そばのテーブルの上にそっと置いたことにテフテフは気がつきました。読書に疲れてしまったのかもしれませんが。

でもテフテフはそうではなく、読んでいた物語が最も面白いシーンにさしかかったところでした。だから本を閉じることなど考えられず、そのまま読み続けたのです。

いつの間にか時間がたっていたようでした。なんとなく顔を上げたとき、イスのひじ起きにもたれかかって魔王が居眠りをしていることにテフテフは気がつきました。

テフテフは胸がどきどきし始めました。深く眠っているようで、魔王の体はぴくりとも動きません。そつとかがんで、袋に開いた穴ごしにのぞき込むと、まぶたがぴったりと閉じているのを見ることができました。つばを飲み込み、音を立てないように注意して、テフテフは本をテーブルの上に置きました。そして息を止め、ゆっくりと魔王に近づいていったのです。

テフテフはそつと手を伸ばしていったのですが、その目的は明らかでした。居眠りをしているすきに袋を持ち上げ、魔王の素顔を見てやろうというのです。

最後まで魔王は目を覚ますことはありませんでした。テフテフは成功し、魔王の顔を見ることができたわけです。背が高いせいで誤解していて、少し意外だったのですが、テフテフが思っているよりも魔王は若いようでした。ドレスのそで口から見えている手やのどのあたりの感じから、魔王が白い滑らかな肌を持っていることはテフテフも知っていました。魔王の素顔はそれに似つかわしく、テフテフよりはもちろん年上だけれど、それでも若い娘のものだったのです。醜い顔であるなどどこでどうやって思い込んだのか、彼女の顔は本当に美しく、美術館で見ることができる古い油絵の乙女のようにです。まゆは濃く、額の中央でやわらかいカーブを描いています。その下にある目は、今はまぶたを閉じているけれど、長いまつげがまるでシュロの葉のようです。鼻は小さく、その先はつんととがっています。紅を引いているわけではないけれど、肌が白いせいで唇はいつそう赤く見えます。

ため息をつき、テフテフはそつと元通り魔王の顔に袋をかぶせることができました。魔王は気がつきもしませんでした。何分かして魔王が自然に目を覚ましたときにも、テフテフはずっと本を読んでいたふりを続けていましたが、頭の中ではまったく別のことを考えていました。

女王ジユディというのは、なかなかあきらめない人なのかもしれない。あるとき突然、魔王のスカートの中から耳障りな騒音が聞こえてくるようになったのです。騒音というのは文字通りの意味で、メロディも何もなく調子はずれにやたらとトランペットを吹いたり、鐘や太鼓をチンチンドンドン打ち鳴らしたりするのです。そういう音がスカートの中から聞こえてきて、はじめのうちは魔王もテフテフも笑っていることができたのですが、女王が爆竹を鳴らしたり、猫を何匹も連れてきて、わざと引っかきあいのケンカをさせたりするようになるにいたっては、とうとう我慢ができなくなってしまいました。

魔王と顔を見合わせ、大きいため息をついたあとで、テフテフはスカートの中へごそごそともぐりこんでいくことになりました。いつもと同じような落下があり、女王のトイレに到着したのですが、ケンカしている猫たちを踏んづけないように注意しなくてはなりませんでした。バランスを崩してテフテフが転びそうになるのを、女王は笑って眺めています。「何の用なの？」猫のしっぽを踏みかけ、もう一度バランスを崩しそうになりながらテフテフは顔を上げました。

「いやあなに、過去を返してくれたことへの礼と、ウソをついていただきましたことのわびをしようと思ってな」女王は答えました。

「わびつて、靴下留めのこと？」

「そうだ」

「そんなことよかったのに」

「そうはいかぬ」手を引いて、女王はテフテフをトイレから連れ出しました。すぐに広間へと着いたのですが、そこではなんと宴会の準備が整っているではありませんか。テフテフは目を丸くしましたが、おいしそうな肉料理や新鮮な果物、すてきな甘い匂いをさせている大きなケーキなどが目に入ったときには、思わずにつこりしないではいられませんでした。テフテフと女王だけではなく、きれいに着飾った人々が十人ほどすでに席に着き、二人を待っていました。男も女もいましたが、顔を見て、女王の下で働いている大臣たちであるとすぐにテフテフにもわかりました。

一番の上座にテフテフを座らせ、宴会が始まりました。テフテフは気がつかなかったのですが、丸い形をした大きなテーブルに座る人々の順番はあらかじめ慎重に考えられていたに違いありません。右側はもちろん女王だったけれど、テフテフの左側には見たことのないおじいさんが座っていたのです。

おじいさんは背が低く、年のせいで背中が曲がり、頭もすっかりはげています。白いひげは長く、胸にも届くほどです。大きな耳が、まるでティーポットのつまみのように左右に飛び出しています。テフテフはすぐにこのおじいさんに興味を持ちました。女王が紹介してくれました。「これはキャッシュ博士といって、この国で一番賢いお人じゃ。いつもいろいろなことで私の相談に乗ってくれておる」

「なんとおそれ多いお言葉」キャッシュ博士は遠慮そうに首を左右に振りました。「私などがいかにして陛下のお役に立てましょう」

「謙遜はもうよい」機嫌よさそうに笑い、女王は歯を見せました。

「博士つて、何を研究している博士なんですか？」食事が始まり、口も軽く機嫌がよくなってテフテフは言いました。

「神話や魔力に関することでございます、テフテフさま」

「魔力つて、魔王のことも含みます？」

「もちろんです」博士は大きくうなずきました。

「じゃあ僕、質問があります」

「ほう」博士は笑いました。「何なりと私でお役に立てることでしたら」

隣で聞き耳を立てていた女王の目がこのとききらりと光りましたが、話に夢中になっているテフテフは気がつきませんでした。「魔王は、どうして自分は醜い顔をしていると思ひ込んでいるんですか？」

「おお、それはいささか難しい質問ですな」

「そうですね」

「それにお答えする前にテフテフさま、あなたは魔王の素顔を見たことはありますか？」

「えっ？」意外な質問だったので、テフテフは答えにつまづいてしまいました。そつと見回すと、部屋の中の全員が自分に注目しているようです。女王だけは知らん顔でステーキにナイフを入れ続けていますが、彼女も自分の言葉には聞き耳を立てているに違いないとい



う気がしました。だけどテフテフには、何もいつわったり隠したりする必要はなかったのです。

「うん、ありますよ。同じ巣の中に住んでるんだもの」

部屋中の人々がつばを飲んだようでしたが、キャツシュ博士だけは平気な様子で、眉を上げもしませんでした。すでにナイフを置き、女王までがテフテフを見つめていたのですが。

「ほう。では魔王はどんな顔をしていました？」キャツシュ博士の声が部屋の中に響きました。

「なぜそんなことをきくんです？」テフテフの声は、じらすような笑い声に似ていたかもしれせん。

「好奇心というやつですか」キャツシュ博士は微笑みました。

「へえ」テフテフもうれしそうに笑いました。

「それで魔王とはどんな顔をしているのです？」キャツシュ博士は繰り返します。全員が再び息をのんだようで、部屋の中はぴたりと静かになりました。でもテフテフが口を開く前に、女王の声が響きました。

「それはそうとテフテフ、知っておるか？ 私の母は魔王にも負けぬ偉大な錬金術師だったのだぞ。博士は覚えておろう？」

「よく覚えております」博士はうなずきました。「時間の流れの中に隙間を見つけ、昨日と今日の間に広大な空間を発見されたのも先代の女王陛下でしたな」

「そのとおり」

「その人の魔力って、そんなにすごかったんですか？」今度はテフ  
テフが質問する番でした。

「はい」と博士。

「その人が見つけた、あの……なんだっけ？ 昨日と今日の間の隙間  
って、どうなったんですか？ 今でもあるんですか？」

「あるとも」女王が言いました。「なあテフテフ。おまえが生まれ  
て育った家には、使われていない地下室や壁の隙間などはなかった  
かね？」

「あつたと思うよ」

「ほっておくと、そういう隙間には何が起こるね？」

「ええっと、小鳥が巣を作ったりするかな？」

「小鳥であればまだよい。だが巣を作るのがネズミであつたりコウ  
モリであつたり、場合によっては気味の悪いトカゲだったりもする  
のさ」

「トカゲ？」

「だから日付の隙間にも同じことが起こったのだ。どこからやって  
きたのか魔物どもが住み着いてな」

「魔物？ 魔王の巢のことなの？」

「違う」女王は首を横に振りました。「あそこに魔王の巢が作られるのはもう少し後のことだ。魔物たちがどこからわいてくるのかはさすがの母にもわからなかった。いろいろと努力したのだが、日付の隙間から魔物を追い散らしたり、どこか遠いよその世界へ封じ込めたりすることもできなかった。あの時代はそれはそれは大変だったのだぞ。時計が真夜中の12時を打ったびに、日付の隙間から迷い出た魔物や怪物たちが町中に姿を現したのだ。」

こいつらがまたいたずら者だな。人を傷つけたり殺したりすることとはなかったが、農家の畑は荒らす、人の家の食料庫に忍び込んで中身を空にする。子供の寝室に忍び込んで怖い話を聞かせ、トイレに行けなくしておねしょをさせる」

「おねしょ？」

「笑い事ではないぞ。あるときなど、夜が明けると同時に何十万人もの母親たちがぬれたシーツをいつせいに干さねばならぬ破目になった。天気の良い日だったからよかったが、もし雨でも降っていたら……」

その光景を想像して、テフテフは思わずくすつと笑ってしまいました。それが耳に入ったのでしょうか。女王がにらみつけてきました。「だから笑い事ではないといっておるのだ」

「それである、その後どうなったんですか？」まじめな表情をあわてて装い、テフテフは言いました。

「日付の隙間の中に広大な空間を発見したのは母だ。責任を感じ、

母はなんとか対策を考えようとした。だが魔物たちをあそこへ押し戻し、二度と出てこられないようにする方法はどうしても見つからなかった。連中を閉じ込めておけない以上、母は別の方法を考えるしかなかったのだ」

「どうしたの？」

「日付の隙間の中に、母はまず巨大な城を建てさせた。おまえが『魔王の巢』と呼んでいるもののことだ」

「へえ」と言いたかったけれど、驚きのあまりテフテフの口からはどんな言葉も出てはきませんでした。女王が続けます。

「だがそれだけでは十分ではない。母は魔物たちに女王を与え、その女王の手で魔物を治めさせることにしたのだ。そのために母は私の双子の妹を用いたのだよ。テフテフ、おまえは見たのであろう？ だから魔王は私とそっくり同じ顔をしているのだ。一卵性の双子だったからな、よく似ているのは当たり前だよ」

「えっ？」もちろんテフテフは目を丸くしていました。

「ふん」振り返って博士の顔を見て、女王は笑いました。「やはりさほど驚いてはおらぬようだな」

「何が？」意味がわからず、テフテフはキョロキョロしました。女王につられ、部屋中の視線が博士のほうを向きましたが、博士は平気な顔をしています。

「何のことですか？ 陛下」

「自分が私の双子の妹であるということをおまえはとっくに知っていたのであろう、と私は言っているのだよ」

「どういうことですか？ 私にはさっぱり…」博士は少し困った顔をしています。

「妹よ、芝居はもうよいから姿を見せい。本物の博士はどこへ行った？ 本物のキャッシュ博士はどのように謙遜をする人物であるものか。傲慢で不遜でどうしようもない男であるぞ。さあ妹よ、本物の博士はどこだ？」

このとき、テーブルの下からゴトゴトと奇妙な音が聞こえることにテフテフは気がつきました。しっかりとした大きなテーブルで、真っ白なテーブルクロスがかかっているのですが、誰かが下に隠れて、テーブルの足をたたいてでもいる感じなのです。それも強く勢いよくではなく、いかにも手足をしばられて不自由な中でかろうじてという様子です。

テーブルクロスを持ち上げ、テフテフは下をのぞき込みました。すると、しばられて床に転がされている男と目が合うことになりました。頭のはげたかなりの年の老人で、怒りに満ちた血走った眼で見つめ返してきます。顔かたちはもちろんキャッシュ博士とまったく同じです。驚いて顔を上げ、テフテフは自分の左側に座っている人物と見比べてみようと思いました。するともう一度びっくりしたのは、左側の人物はもはや博士の姿はしておらず、濃いブルーのドレスを身につけた魔王その人だったことです。それに魔王は、それまでずっとかぶっていた黒い袋を脱ぎ捨て、部屋の中に素顔をさらしていました。さっそく女王が声をかけました。

「元氣そうで何よりだな、妹よ」

魔王は機嫌悪そうににらみ返しましたが、女王は気にする様子もありませんでした。「テフテフ、本物のキャツシュ博士はこのテーブルの下にいるのか？」

「うん」

「まあよい」女王は笑いしました。「小うるさい男であるから、そこで静かにさせておこう。そのほうがよほどよいわ」

「姉上」魔王が口を開きました。「私が自分の出自を探り当てたことをなぜ知っておる？」

「ふん」女王は鼻を鳴らしました。「おまえはそのために過去管理局などというものを作ったのであろう？ 過去の秘密を探り出すのにそれ以上の方法はないからな。誰のどんな過去でもおまえは盗み見ることができたはず。私の過去について書かれたファイルにも当然目を通したであろう」

「しかし…」

「そうやっておまえは自分の出自を知るにいたった。目的は達したわけだ。ならば過去管理局など無用の長物。さっさと解散してしまったのも当然だろうよ」

「じゃあ僕は、何も知らずにただ働きをしてたの？」とテフテフが思わず大きな声を出したときゴソゴソと音が聞こえ、本物のキャツシュ博士がテーブルの下からやっとな姿を現しました。何とか自力で縄を解くことができたのでしょう。女王がとばけた声を出しました。

「キャツシュ博士、今日のご機嫌はいかがかな？」

「よろしいわけがありますまい。ああ痛かった」魔王をにらみつけながら、博士は自分の肩や背中を手で押さえています。きっと縄が強く食い込んでいたのでしょう。

「しかし女王陛下」キャツシュ博士は表情を変えました。「今はわしの体のことなどを話している場合ではありませんまい。すぐにもあの話を始めましょうぞ」

「そうだったな」女王はうなずきました。「妹よ、おまえとテフテフをここへ呼んだのは、実はその話をするためだったのだ。よいニュースでもあるしな」

「よいって？」とテフテフが不思議そうな顔を見ると、珍しくも女王は微笑み返しました。

「私と妹には特によいニュースではあるが、おまえたち一般の国民にとってもよいことであるのは間違いないだろう」

「どうして？」

「説明するよりも見せたほうが早い。ついてくるがいい」女王は立ち上がり、もちろんテフテフたちはついていくことにしました。そろそろと部屋を出て廊下を歩き、地下へと続く急な階段を下りていったのです。途中で何回もひじのようにきつく曲がる階段でしたが、とうとう終点につきました。終点は学校の教室ほどの大きさの部屋で、地下だから窓は一つありません。薄暗い電灯で照明されていましたが、もしかしたらそんなものは必要なかったかもしれません。小さな墓石以外は何もなく、床には四角い石畳が敷き詰めてあるの

ですが、その中央あたりがぼんやりと赤く光っているのです。いかにも石が高熱を発しているという感じで、立ち止まってテフテフは額の汗をぬぐうことになりました。

「あれが母の墓なのか？」魔王が口を開きました。

「自分の死後はこのように埋葬せよと遺書に書かれていた。だから私はそうした。墓を作るには奇妙な場所だと思ったが、故人の意思なのでな」女王が言いました。

「ねえ」突然心細くなって、テフテフは魔王のドレスのそでを引っ張りました。

「どうした？」魔王が見下ろします。

「あの光って、なんとなく怖くない？」

「何を言う？」少し怒った顔で、女王が振り返りました。

「だってお墓というよりも、まるで噴火の前触れみたいな感じだよ」

「何を下らぬことを言う」女王は鼻を鳴らしました。「近頃の子供ときたら…」

ところがそのセリフは途中で止まってしまいました。ゴトンゴトンと重々しい音が突然地下室の中に響き渡ったからです。テフテフを含めて、全員が息をのむことになりました。床に敷き詰められた石が強い力で押し動かされ、互いにぶつかり合って立てた音だったのかもしれませんがすぐに消え、もう何も聞こえなくなっていました。墓石にはあの薄赤い輝き以外は何もなく、何か変化がありました。



た様子は見られません。ほっとため息をつき、テフテフたちは口を開こうとしました。でも結局、誰も何の言葉を発することもできませんでした。

音を立て、予告もなく墓石がズルリと動いたのです。こんな地下にあっても女王の墓にふさわしい重さが何百キロもある大きなものですが、それがまるで風に押されたヨットの帆のように、１メートルばかり横へと移動したのです。そして気がつくと、墓石があった跡には四角い穴が黒々と口を開けているではありませんか。テフテフたちは顔を見合わせ、博士は女王の背後に隠れ、魔王はテフテフの肩を指先が食い込むほど強くつかんでいます。テフテフも痛みすら感じていないようです。火山のようだった石の輝きはいつの間にか消え、部屋の中が地下室にふさわしくひんやりとなっていることには誰一人気がついていませんでした。

「姉上」しばらく間があってから、やっと魔王が口をききました。

「あの墓石の下には、あのような階段が以前から作ってあったのか？」

背伸びをし、テフテフもおそろおそろのぞき込んだのですが、確かに魔王の言うとおりでした。狭くきつい階段で、一人がやっと通れるだけの幅しかなく、二人の人がすれ違うことはできないでしょう。まるでテフテフの家にあった地下のワイン倉へ降りてゆく階段と同じようなものでしたが、あれよりもずっと長く、勇気を出してのぞき込んでも、踏み段が何十もまっすぐに続いているだけで、その先に何があるのかは暗すぎて見ることはできません。

「墓の詳しい構造については」女王が口を開きました。「私もよくは知らんだ。母の遺書には図面が添えてあつてな。私はそれを建築家に渡し、その通り作らせたまでだ。即位の準備で私もひどく忙

しかった。博士は何か聞いていないか？」

「いいえ」キャツシュ博士は首を横に振りました。「先代陛下の埋葬には、わしは関わっておりませんので」

「そうであつたな。忘れておつた」女王はうなずきました。

「それで姉上」魔王が言いました。「これから何が起こるのか、私たちはここに立つたままで待つのか？」

「あの階段を下りていつてみる？」テフテフが指さしました。

女王と魔王は顔を見合わせました。キャツシュ博士までが困った顔をしていましたが、悩む必要はなかったのかもしれない。このとき地下深く、あの階段のずっと下から、かすかではあるけれど足音が聞こえ始めていることにテフテフが気づいたからです。「あれは何？」

耳をすませ、女王たちもそれに気がつきました。

ゆっくりとしたペースですが、足音はだんだんと大きくなってきます。明らかに誰かがあの階段を上ってきつつあるのですが、重々しい大男というのではなく、いかにも体重の軽い人物、それもなぜか女だという感じがします。だけど恐ろしくて、その人物がとうとう階段の出口に姿を現すころにはテフテフは魔王のスカートの後ろに隠れてしまい、顔だけを出してのぞき見ていました。

階段を上がり終え、足音の主がとうとう地下室に姿を見せたのですが、その人の顔を知っていることにテフテフは自分でも驚きを感じました。だけどその理由はすぐにわかりました。この国の紙幣に

肖像画が印刷されている顔だから、テフテフも普段から目にしていたのです。ということは、これが先代の女王に違いありません。

そのことはテフテフも一瞬で納得することができました。でもふに落ちないというか、奇妙に感じる点がなかったわけではありません。元はただの人だったとはいえ、これは一度死んで、『よみの国』から戻ってきた人なのです。その人が生前と同じ顔色をし、皮膚がかさかさになっていっているわけでも目が落ちくぼんでいるわけでもなく、生きている普通の人と髪や服装だってまったく変わらないというところが、テフテフにはとても不思議に思えたのです。だから眉にしわを寄せ、小難しい顔をして考え込んでいたのですが、それもすぐに邪魔をされることになりました。「母上」と叫び、どたどたと大きな足音を立て、女王が駆け寄っていったからでした。

「おまえは…」先代女王もその姿に気づいたようです。同時にテフテフは首を曲げ、魔王を見上げるようになりました。フンと鼻を鳴らすのが耳に入ったからです。テフテフは片方の眉を上げかけましたが、魔王の態度も理解できる気がしなくてもありませんでした。先代女王と女王ジュディはすでに言葉を交わし始めています。「母上、なんとお懐かしい」とか「娘、おまえも大きくなったな」などと言っているのが耳に入ります。

「ふん」と魔王はもう一度大きく鼻を鳴らしましたが、テフテフがそつと指をからませると気づき、下を向いてかすかに微笑みましたが、でもそのとき先代女王が声を上げたのです。

「そこにいるもう一人の娘は誰だ？ おまえとまったくそっくりな顔をしているが」

先代女王は魔王を指さしていたのです。意味に気づき、女王ジュ

ディは少し顔色を変えましたが、何を言う暇もありませんでした。その前に魔王自身が口を開いたからです。「生まれた直後に、おまえのせいで名もつけられぬまま魔王の巢へと送られた哀れな娘だ。魔物たちが私の育ての親なのだ」

「おお」心を動かされた様子で、先代女王の表情が変わりました。「そうであったか。だがおまえは名無しであったわけではないぞ。ちゃんと名づけた後で私は日付の隙間へと送ったのだ。他に方法はなかったのだと言っても気持ちはやわらぐまいが、おまえは決して名無しなどではないということだけは覚えておくがいい」

「口だけなら何とでも言えるわ」魔王は怒った顔をくずそうとしません。

「キャツシユ博士」不意に先代女王が話しかけました。「おまえなら覚えておろう？ 私はこの娘をなんと名づけた？」

「はい」キャツシユ博士は一步前に進み出ました。「わしのような者を覚えていくのださって、光栄に存じます」

「忘れるものか」先代女王は笑いました。「それで私はこの娘をどう名づけた？」

「はい。この老いばれの記憶が間違っておらぬなら、たしかオルカさまと」

「オルカ？」と大きな声を上げたのはテフテフです。

先代女王はうなずきました。「海に住む中で最も強く、気高い生き物だ。魔物たちに囲まれても力強く生きていくことができるよう

に願って名づけたのだ」

「結局いつも日付の隙間のしりぬぐいの話に戻ってくるのではないか」魔王は不満そうでした。

「しかし少なくとも名無しではありません」キャッシュ博士が言いました。「それに、決して醜い顔をしているのでもない。姉様と同じ美しい顔をお持ちです」

「私のほうが美人じゃ」女王が抗議しました。

「バカ姉が」魔王はつぶやきました。

「ねえ」手を引いて、テフテフは魔王を先代女王のそばへ連れていこうとしました。でも魔王の足は動く気配がなく、テフテフはあきらめるしかありませんでした。

「それはそうとオルカ、おまえは魔王なのであろう？」先代女王が声を上げたので、みな少し驚きました。

「そうなのであろう？」全員に見つめられ、先代女王は微笑みしました。

「ならばどうした？」魔王がにらみ返します。

「どうもせぬ。ただ私がおまえをオルカと名づけたという証拠を見せてやろうと思ってな」

「そんなものがあるものか」

「あるさ。日付の隙間へ送るとき、魔力の元となる靴下留めを私は持たせてやった。今でも身につけておろう?」

「もちろん」きつと無意識にしようが、魔王がスカートの上から太ももを押さえたことにテフテフは気がつききました。

「その靴下留めに私はおまえの名を書いておいたのだ。おまえの名がオル力であり、かつ私の娘であるというしるしとしてな」

「うそだ」魔王は大きな声を出しました。「名などどこにも書かれておらぬぞ」

「よく見ておらぬからだ」先代女王は笑いました。

「毎日身につけておるのだ。気づかぬはずがない」魔王は反論を続けます。

「探し方が悪いのだ。少しわかりにくい場所に書いてあるということもあるがな。貸してみよ。教えてやる」

「おまえのいい加減なうそになど付き合う暇はない」

女王ジュディと顔を見合わせ、先代女王はもう一度笑いました。

「おまえの妹はいささか頑固であるな」

「うそかどうかはすぐにわかることだ。靴下留めを母上にお渡しせい」とうとう女王ジュディが口を開きました。でも魔王は返事などせず、じろりとにらみ返すだけです。女王ジュディは話しかける相手を变えることにしたようでした。「テフテフ、オル力から靴下留めを受け取れ。母上にお渡しするのだ」

どうするのという顔でテフテフが見上げるので、ついに魔王は手を動かさざるを得なくなりました。まだ不満そうな表情ではあったけれど魔王はスカートをまくりあげ、手を伸ばしたテフテフがその靴下留めを外そうとするのを見て、キャッシュ博士は思わず目をむきました。他の人たちはどうこうは思わないようでした。靴下留めを外し、テフテフは手の中に握ることができました。

「それを早くよこせ」いかにもじれったそうに先代女王が声を上げました。その彼女に向かってテフテフは一步を踏み出しかけていたのですが、突然何かを感じとった様子です。すぐに立ち止まりました。

「何をしておるのかな」いらだちを隠し、先代女王は猫なで声を出しました。そしてこの声が、テフテフに最後の確信を与えたようでした。

「ねえ先代陛下」テフテフは靴下留めを自分の背中に隠しました。

「どうした？」先代女王は目を丸く大きく見開いています。今にも舌なめずりを始めそうな感じといえばそうかもしれません。

「この靴下留めを手渡す前に質問したいことがあるんだけど、いいかな？」

「何を言っておる？」女王ジュディまでが不審そうな顔をし始めましたが、テフテフの考えを察したキャッシュ博士が目配せをして、それ以上言つのはやめさせました。

「質問だと？」先代女王が答えました。「なんでも答えようぞ」

指先でつまみ、テフテフは靴下留めをぐるぐると振り回し始めました。それを追いかける先代女王の目玉は、まるでおあずけを食っているときの犬のようです。テフテフは彼女をわざとじらしていたのでしようが、効果は絶大でした。

「質問とは何なのだ？ 早く言え」先代女王はとうとう大きな声を出しました。

「僕の体の匂いをかいで、その感想を述べてよ。何の匂いに似ているかとか。そうしたらこれを渡すよ」子猫をあやすときのようにして、テフテフは靴下留めを振ってみせました。

「そんなことが。簡単ではないか。早くここへ来い。匂いなどいくらでもかいでやるぞ」

この後は、いったいどういうことが起こったのだと思います？ テフテフやキャッシュ博士はある程度予想していたのかもしれない。だからこんな作戦をとったのでしょう。自分の体臭が魔物たちにとつてはえもいわれぬものであるということはテフテフも承知していました。だからそれを利用したわけです。

テフテフがそばに来て、その体に鼻を近づけるだけで、とたんに先代女王の表情が変化しました。あれほどほしがっていた靴下留めのことなど忘れ、まわりにいる人々のこともとたんに目に入らなくなってしまう様子です。深呼吸をするように大きく息を吸ったのです。

次の瞬間にはテフテフたちは呆然とし、キャッシュ博士などは口をぽかんと開けることになりました。先代女王の鼻がどんどん長く、



大きくなっていったのです、テフテフもあっけに取られ、自分の匂いには相手の鼻を巨大化させる力があるのだろうかと一瞬思ったほどでしたが、もちろんそういうことではありません。鼻の形や大きさだけでなく、匂がつくと先代女王の体全体が変化しようとしていたのです。きっとあれは何かの怪物で、それが魔力でもって先代女王の姿に化けていたのでしょう。魔力のことはテフテフもよく知りませんでしたが、何かに化けたままにいるというのはかなり大変なことなのかもしれません。少しでも気を抜くと、古い自転車のタイヤから空気が逃げていくときのように魔力が薄れ、あっという間に本来の姿に戻ってしまうのでしょうか。

そしてテフテフの体は、魔物の集中力を失わせてしまうほどのよい匂いを発しているということなのかもしれません。怪物はついにその姿を現すことになりました。なんとその正体はイノシシだったのです。体中に黒く長い毛が生え、口には牙がある凶暴な野生のブタです。ブタの親戚だから鼻は同じような形をして、前へ向かってずんと突き出しています。鼻の穴も大きく目立ちます。魔力が破れるとき、まず鼻だけが巨大化するように見えたのはそのせいでしょう。

あつと気がついたときには巨大な鼻を押し付けられ、テフテフはイノシシの荒い鼻息をブヒブヒとあびせられていたわけでした。でもそれが並の大きさのイノシシではないのです。大きいなんてものではなく、普通の自動車には乗せることもできないでしょう。トラックを使うとしても小型や中型ではなく、大型トラックを持ってこなくてはならないに違いありません。

「ガビビビビ」あまりに巨大なので、イノシシの鳴き声はこう聞こえました。びっくりしてテフテフは飛びのこうとしましたが一瞬遅く、靴下留めはあつという間にその手から奪われてしまいました。

そしてなんということでしょう。器用にもイノシシは、それを自分の前足にさつとはめてしまったのです。それがどんなに奇妙な光景だったか、説明する必要はないでしょう。乙女が身につける愛らしい靴下留めを、毛むくじゃらで巨大なイノシシが足につけているのです。でもその光景を笑う人は一人もいませんでした。

「妹よ、どうするのだ」女王ジュディが声を上げました。「博士でもよい。なんとかせい」

「そういわれましても……」キャツシュ博士もうつろたえて、そう返事をするのが精一杯の様子です。

「ブビビビ」イノシシがひときわ大きな声を出しました。勝利の雄たけびというところかもしれない。まるで闘牛場の牛のように、前足で床を強く引っかかり始めました。勢いをつけ、こちらへ突っ込んでこようというのでしょうか。

「どうするのだ、姉上」

「知るか」

結局みんな一緒になって、どたどたと大あわてでその場から逃げ出すほかありませんでした。とたんに博士が床に転んでしまったので、テフテフは助けてあげました。もつれ合うようにしながら階段で押し合いへし合いをし、テフテフたちは地上へと登っていききました。幸いだったのは通路が狭く、イノシシは速く走ることができなかったことです。体の両脇を壁にこすり付けながら、むりやり通り抜けていくことになりました。壁からはがれた石のカケラが、ばらばらとこぼれ落ちます。だからテフテフたちが広間まで逃げ戻っても、イノシシが姿を現すまで1分ほど余裕がありました。

「妹よ、おまえがなんとかせい」

「私は知らん。私の責任ではないぞ」

「怪物どもはおまえの管轄であろう？」

「靴下留めがないと私には何の魔力もないということをお忘れか？」

「ええい。博士がテフテフでもよい。あのイノシシを何とかするのだ」口を大きく開き、女王はどなっています。若いからそういうことではないけれど、もし年を取ったおばあさんであつたら、きつと入れ歯を１メートル以上飛ばしてしまつたであらうと思える勢いです。

「何とかしろとおっしゃいまして」走つた直後なので、博士は肩で息をしています。「とりあえず兵たちを呼ばれてはいかがでしょう」

「おお、そうであつた」隣の部屋へ駆け込み、女王は大きな声を出しました。すぐに家来たちが駆け寄つてきたので、一人でも多くの警備兵を集めるように言いつけました。狭い通路を抜け、とうとう地上までやってきたのか、イノシシの足音が城の中に響いたのはこのときのことでした。

あの足が発するのだからその足音は大きく、まるで大砲の音のように聞こえます。きつとまわりを見回しながら、テフテフたちがいる場所を探しているのでしょう。その音がだんだん大きくなってくるのがわかります。女王や博士などはもう真っ青になっています。

30人ほどの警備兵がやっと集められましたが、どうひいき目に

見ても何かの役に立つとは思えませんでした。みなぶるぶると震え、銃のねらいもまっすぐに定められないほどで、廊下の先にいるイノシシににらまれて、今にも気を失うか、わらわらと逃げ出してしまいいそいです。「かまえ！　ねえ！」と隊長は大声で指揮していますが、兵たちはすっかり浮き足立ち、銃を支えるために床に片ひざをつくことさえできません。

それでも射撃は何度か行われました。ダンダンと音がし、部屋の中を煙が満たします。発射された弾丸のうちの半分しか命中することはなかったけれど、それにしたところで硬く強い毛ですりりとはじかれ、はね返されてしまうのです。よく見るとイノシシは体の表面に泥と砂を塗りつけ、それを分厚く固めてまるでヨロイのようになっているのです。これでは銃など歯が立つはずはありません。

「大砲をもつてこい、大砲だ」と女王が叫びましたが、城の中にそんな物があるはずはありません。とりでから運んでくるにしても、きつと何時間もかかってしまうでしょう。突然イノシシがロケットのように飛び出して、こちらへ向かって猛然とダッシュしてきました。浮き足立っていた兵たちは散り散りに逃げようとしたが、何人かは間に合わず、まるでボーリングのピンのようにはね飛ばされてしまうことになりました。

「姉上」兵たちの悲鳴とうめき声の中に、魔王の声が響きました。広間を横切り、イノシシは反対側のはしまで行って急ブレーキをかけ、憎々しげにこちらを振り向いたところでした。兵たちはもう役に立たず、女王を守るものは誰もいません。女王に対して鼻をまっすぐに向け、イノシシはねらいを定めようとしていました。次は女王に向けて突っ込み、殺してしまおうというのでしょうか。

「姉上！」もう一度魔王の声が響きました。

「オルカ、私を助けてくれ」

「助けたいのは山々だが、私も靴下留めがなくてはな」いつの間にどうやって登ったのか、魔王はテフテフと一緒にシャンデリアの上にいました。城の広間なのだから巨大なシャンデリアで、自動車ほどもある大きく重いものですが、船のイカリに使うような太いクサリでもって天井からつり下げられています。魔王とテフテフはそのシャンデリアによじ登っているのです。あそこならイノシシも簡単に攻撃できないに違いありません。

「何でもいいから、このイノシシをどうにかしてくれ」女王は泣き声を上げました。

「助けてやったら、姉上はお返しに何をしてくれる？」魔王の声はいやに冷静でしたが、もちろん女王にはそんなことに気づく余裕はありません。

「何でもする。何でもするから助けてくれ」

「ならばテフテフを姉上の正式の跡継ぎと認め、20歳の誕生日には王位を譲ることを約束するか？」

「何だと？」いくらこんなときであっても、魔王の言い草の奇妙さに女王も気がついたでしょう。不審そうに顔をゆがめます。「何だと？」

ところがなんとというタイミングのよさなのか、このときイノシシが大きく息をはき出し、ひづめのある大きなつま先で床を強くこすったのでした。女王に向かって、今にも突撃をかけそうな感じです。

「わかった、わかった。何でもいうことをきく」と女王も答えるほかありませんでした。

「それは確かだな？」

「ああ、約束する」

「テフテフを姉上の跡継ぎと認め、20歳の誕生日に王位を譲るな？」

「ああ、その通りにする」

「なら結構」魔王はうれしそうに笑いました。「実に素直でよろしい」

シャンデリアから手を離し、魔王が一人でぴょんと床に飛び降りてしまうのを見て、テフテフは目を丸くしないではいられませんでした。魔王は本当に気軽に飛び降りてしまったのです。そこは、興奮して蒸気機関車のように鼻息を荒くしているイノシシのすぐ目の前にあたります。距離は3メートルもないでしょう。でも怖がる様子もなく、魔王は平気な顔をしているのです。何がどうなっているのか、誰にもさっぱり理解できませんでした。

もちろんイノシシは魔王をにらみつけていました。今にも突撃をかけてきて魔王がぺちゃんこにされてしまうのではないかと、テフテフは心臓が止まってしまいそうな気持ちになりました。でも魔王はやはりなんでもない顔をしているのです。

それがイノシシをさらに怒らせたのかもしれない。鼻と口から大きく息をはき、まるでそのうちに火でも噴き出しそうな感じです。

しかしイノシシは、魔王に向かって突撃することはありませんでした。ひよいと手を伸ばし、人差し指の先で魔王がイノシシの鼻に触れるのが見えました。すると何が起こったと思います？

テフテフも呆然としてしまいました。イノシシの動きが一瞬で止まり、大きな音を立ててドタンと横倒しになってしまったのです。息をするどころか足の一本、しっぽの先をピクリとさせることさえもうありませんでした。イノシシの心臓が一瞬で止まってしまったのは明らかでした。それだけではなく、とてもおいしそうな匂いが鼻をくすぐり始めたことに気がつき、テフテフが当惑を感じたのも無理はなかるうと思います。

「どうした？ 何が起こったのだ？」女王が声を出すことができるようになったのは、何秒もたってからでした。ニヤリと笑いながら、魔王が振り返ります。

「特大のヤキブタができた。うまいぞ、姉上も食わぬか？」

「何がどうなってるの？」テフテフが声をかけると手を伸ばして、シャンデリアから降りるのを魔王が手伝ってくれました。おそろおそろ近寄ると確かにイノシシは丸焼けになり、毛もちりちりになって、いかにもおいしそうなヤキブタであることはテフテフにもわかりました。女王やキャッシュ博士だけでなく、体中を痛そうにさすりながら兵たちも近寄ってきました。すぐにコックたちが呼ばれ、大宴会のしたくが始まったのはいうまでもありません。イノシシは中庭に運び出され、城中の人々が呼ばれ、よく焼けた肉をほおばることになったのですが、もちろん一番の話題は、魔力が使えないはずの魔王がどうやってこれを倒したのかということでした。

宴会の席ではお酒も振舞われましたが魔王は一口も口にすること

はなく、テフテフを隣に座らせていました。彼女はおしゃべりではなく、自慢話が好きなわけでもありませんでした。でもみんなから問われ、とうとう説明を始めました。

「私はただ、魔力を使ってやつをやキブタにしてやつただけだ」と魔王は言いました。

「しかしオルカ様は、靴下留めがなくては魔力は使えないのではありませんか？」とキャツシュ博士が言いました。

魔王はちらりと女王ジュディに視線を走らせました。「まだ小さいので、テフテフは右と左の区別がきちんとついていない。それはいつかのときに姉上も経験済みであろう？ だから二セの母上に靴下留めを渡すとき、私がスカートの左側を持ち上げさえすれば、何も迷うことなくテフテフは左側の靴下留めを外した。私の魔力が宿っているのは、左ではなく右側の靴下留めであろう？」

「計ったな」肉の塊に突き刺そうとしていたフォークを置き、女王は憎々しげににらみつけました。

「しかし陛下」キャツシュ博士がとりなそうとします。「そのおかげでイノシシを倒すことができたのです。あの怪物が魔力を得た場合のことをお考えください。どんなに恐ろしいことになったか。きっと世界は滅び去ってしまったでしょう」

「だがおかげで、私は王位を失う羽目になった」

「ねえ僕」テフテフが口をはさみました。「20歳になったら本当に王様にならなくちゃならないの？」



「いやと申すか？ キャンセルはいつでも歓迎するぞ」女王が顔を輝かせたのはいうまでもありません。

「よくわからないや」テフテフは首を横に振ります。

「キャンセルなど私が許さぬ」魔王が顔を上げました。「テフテフを王位につけぬというのなら、私は姉上の秘密を洗いざらい国民たちにはちまけてやるぞ」

「秘密？ 何の秘密だ？」女王が目をむきました。

「忘れたか？ 私は姉上の過去の行動をすべてしるしたファイルに目を通したのだぞ。どんなことでも知っておるわ。たとえば3年前の夏の夜……」

「待て」女王の顔色が信号機のように突然変わるのには、見ていてこっけいなほどでした。「待て。その話だけは絶対にするな。冗談でも口にするな」

「それはいったい何のお話です？」興味を持ったふうに、家来の一人が口を出しました。

「聞きたいか？」魔王がにやりとします。

「待てオルカ。それだけは絶対にしゃべるな」

女王の表情があまりにも必死なので、とうとう人々は大きな声で笑い始めました。これでテフテフの即位はまず確定でしょう。女王ジユディの時代にもいずれ終わりが来るのだと知って気が軽くなり、人々ももうジユディのことがあまり怖く感じられなくなったのでし

よう。中庭には遠慮のない笑い声が響き始め、城の中だけでなく、明日からはこの国全体がもう少し明るい雰囲気に変わるかもしれません。

でも大人たちの笑い声を聞きながら、テフテフだけは一人でまったく別のことを考えていました。20歳になったら僕は本当にこの国の王になるのかななんて、まるで夢のような気持ちがありました。が、たぶん実際にそうなるだろうということは自分でもわかっていました。そしてそのとき、きっとオルカから結婚を申し込まれることになるだろうということもなんとなく感じられました。花嫁のほうは年上だし、年齢も少し離れているけれど、彼女がそう決心していることは確かだと思えたからです。つまりテフテフは国の王であると同時に、魔王を妻とすることになるわけです。

オルカははじめから、テフテフがこの国の王位を得られるようにはからっていたのでしよう。先代女王の墓に怪物が住み着いたのは偶然の出来事なのだろうけど、それをとっさにうまく利用したわけですね。今はまだ幼い未来の夫に対する、彼女なりの最大のプレゼントということなのでしょう。

なんということだろうとテフテフは思いました。思わずため息が浮かんできます。でもいやな気持ちのため息なのではありません。テーブルにはおづえをつき、いつの間にかテフテフは空想を始めていました。そしてそれがきらきら輝くヨロイと美しい衣装を身につけ、白馬にまたがり、同じように着飾ったオルカを連れて野を駆け、自分の姿だったことはいまでもありません。

(終)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2007g/>

---

魔王のスカートの中

2011年11月11日09時32分発行